

1 銀の狐

「そら行けー、ほれ行けー！」

ほんとうは狐に聞こえないように小さな声でしたけれど、ニーダマは愛馬パカラの耳に口を近づけて言いながら、かかどで腹をけりました。あの、美しい銀の狐が、今まさにニーダマの目の前に姿を現したのです。これは興奮しないわけにはいきません。

ニーダマは一瞬たりとも目を離さないようにしながら、腰にゆわいた弓矢を後ろ手にまぎぐりしました。すると突然、パカラの足が真つ白い氷の上で滑り、キラキラと光る氷の霧を巻き上げました。そうです、夢中でパカラを走らせているうちに、いつの間にかニーダマは凍った湖に入ってしまったのです。

ニーダマは、ふと背後を振り返ります。白く煙る視界の向こうには、色とりどりの春の花が咲き乱れていました。

銀の狐が足を止め、こちらに顔を向けました。そして、首をちよつと振ってコーンとひと声鳴くと、氷の上を悠々と歩き出しました。

「おのれ、狐め！ おれ様を馬鹿にするなよ」

ニーダマはパカラの腹を、力いっぱいけり上げます。びつくりしたパカラは、ヒヒーンといかないで走り出しました。

銀の狐を目指して、弓をぎゅつと握り締めたニーダマはパカラを急がせます。

ぎよつとした表情を銀の狐が浮かべたその時でした。パカラは氷のひびに蹄をひつけてしまい、すってんころりんとひっくり返りました。宙に投げ出され固い氷の上に落ちたニーダマは、おのれ！ と声を上げて痛むお尻を押さえながら立ち上がると、足が滑るのも平気で駆け出します。もちろん、右手にはしつかりと銀の弓を握りしめ、その瞳は銀の狐の姿を決して見失うものかと、らんらんと燃えていました。

そして――

走りながら矢をつがえ、銀の狐に狙いを定めたニーダマは、パカラと同じように氷の裂け目に足を取られてしまいました。でも、ニーダマは転んだだけではすみません。転んだ拍子に足をくじいてしまったばかりか、握り締めていた弓の先で、その眼を強く打ってしまったのです。ニーダマは苦痛に顔を歪めて氷の上を転げ回りました。でも、不幸はそれだけでは終わらなかつたのです。転んでも手放さなかつた銀の弓に寄りかかりながら、なんとか立ち上がったニーダマの足下で、薄い氷がめりめりと破れました。痛みにぎゅつと眼を閉じたままのニーダマの体は、みるみるうちに冷たい湖へと吸い込まれていくのでした。

2 ローズン

ニーダマの姿を、黒い針葉樹の陰から冷たい眼差しでじつと見守る姿がありました。北の魔女、ローズンです。ローズンは、ゆつくりと木陰から姿を現し、すすーつと凍っ

た湖面を滑ります。銀の狐が足を揃えてきちんと座り、ローズンの姿をじつと見上げます。

今まさにニーダマの顔が湖の中に消えんとした瞬間、ローズンの杖がついつとニーダマの目の前に差し出されました。ニーダマは凍てつく氷のふちから手を放すと、なんとか手を伸ばして杖を握りしめました。沈みかけていた顔が少しだけ浮き上がり、ほんの一瞬、杖を手にした女の顔を認めました。それが誰だかなんて、今のニーダマにはどうでもいいこと。ただ弓を捨てた右手にありつた力の力を込め、必死の思いで杖にしがみつきました。

ニーダマはすっかり凍えてこわばった口で何かを言おうとしましたが、歯ががくがくと震えてしまい、言葉を絞り出すことはできません。ローズンは顔色一つ変えず、杖を差し出した手も動かさず、ただじつとニーダマを見つめていました。

銀の狐がささきつとローズンのそばに駆け寄ると、不満げに杖の先を鼻で突きます。

「フォルウ……？」

だつて、自分を殺そうとした手ですもの。きつと銀の狐——フォルウという名前なのですね——は、ローズンの行ないが不満だったにちがいません。

ローズンはフォルウに優しく微笑みかけて、首を左右に小さく振りました。ローズンはしつかりと杖を握っていました。ニーダマにはもう杖を握り続けるだけの力が残っていません。すっかり凍えきつて気を失いかけているニーダマの体は、ずるずると沈んでゆくほかありませんでした。その目はうつろで、何も見えてはいません。もう、ニーダマは頭まですっかり沈んでしまい、穴の空いた湖面にはゆらゆらと髪の毛がたゆたつていました。それを見届けたフォルウは満足げに、小さな鳴き声を上げました。

その声に、ローズンはふと我に返つたように湖面へ目をやると、杖を持つ手に力を込めました。すると、白い手のひらから青白い光がふわりと立ち昇り、杖を伝うと、わずかに杖の先にかかったニーダマの指から手のひらへと広がり、腕を、そして凍てついた水に沈む体を包み込みました。

ローズンの眉に力がこもります。滑らかに磨き上げられた美しい杖を静かに持ち上げると、青い光に包まれて、ニーダマの体が徐々に氷の上へと姿を現しました。ローズンはほつとしたような顔を刹那に浮かべると、ぱつと振り向いて歩き始めました。

ローズンの後には、真つ青な顔をして息も絶え絶えなニーダマがゆらゆらと浮かび、まるで見えない糸で引かれるように空中を漂って行きました。その後ろを、銀の狐フォルウが氷の欠片をけ飛ばしながら、つまらなさそうに付いて行きます。

3 笑い声は春の空に

ローズンの後をふわりと引つ張られて行く間に、ニーダマの体はすっかり乾いていました。でも、冷え切った体の熱は戻っていませんし、くじいた足首はひどく腫れていました。右目のまぶたも腫れ上がったままで、どうしてか、両眼ともに開けることができないようでした。

ローズンはとっておきのお客さまのために手入れされた小さな部屋で、暖かなベッドにニーダマを寝かせてそつと毛布を掛けると、ちらちらと燃える暖炉に薪をくべに行こうとしました。

「ありがとう……」

ニーダマの弱々しい声が聞こえたのと同時に、その手が毛布の外へ伸び、ローズンのドレスの裾をつかみました。でも、手にはあまり力が入らなくて、そのままだらりと下に垂れてしまったのです。

「まあ……」

ローズンはほつとしたようなびつくりしたような表情を浮かべて振り向くと、その冷たい手を持ち上げて、そつと包みました。

その瞬間でした。ローズンがニーダマに恋をしてしまったのは。そして、眼を閉じたままのニーダマがローズンと恋に落ちてしまったのは――。

でも、まだ二人はお互いの気持ちを知りません。だってニーダマは、そのまま幸せそうな笑みを浮かべて眠ってしまったのですから。

次の日の朝早く、ローズンは温かいスープを手に、ニーダマの眠る部屋を訪れました。ローズンがベッドに面した小さな木窓を開け放つと、森の木々の柔らかな香りがニーダマの鼻をくすぐりました。

「私と結婚してくれませんか？」

目覚めたニーダマは、自分が何を言っているのかも気づかぬうちに、こう言っていました。左目を半分だけ開けて。

「まあ！」

ローズンは真つ白な頬を赤らめてスープのお皿をごとりと置きました。その眼は、じつとニーダマの黒い瞳を見つめています。

「あなたは、『まあ』しか言わないんですね」

「まあ！」

そう言ってしまったから、ローズンは大きな声を上げて笑ってしまいました。それにつられて、ニーダマも朗らかに笑います。その声は、開放された窓から春の爽やかな朝空に気持ちよく響きます。

こんな屈託なく笑うことは二人とも滅多にはありませんでしたから、二人がとつても楽しい気持ちになったのは窓の外にいるフォルウの目から見ても明らかなことでした。

「温かいスープを、お飲みになつて下さいな」

笑いが収まると、ローズンがまろやかな声で言いました。ローズンは、自分の声がまとう柔らかな優しさに、自分でもちよつぴりビククリしてしまったのですよ。だって、ローズンは北の魔女。自分がまるで、南の魔女になったような気がしたんですもの。

「なあんだ、やつぱりちゃんと喋れるんですね！ 安心しましたよ、お嬢さん」
「まあ！」

ローズンはお嬢さんだなんて呼ばれてびっくりして、ついまた『まあ！』なんて言っ
てしまいました。けれどもニーダマは笑わず、真剣な眼差しでローズンの瞳を見つめ
ると、再び言いました。

「ねえ、お返事を聞かせてくれませんか？ 私はあなたと、結婚したいのです！」

4 フォルウ

お屋敷の外に目を向けてみましょう。ぽかぽかと暖かい日溜まりの中を、フォルウが
ゆつくりと歩いています。あれからもう、三日が過ぎていました。フォルウにとつて、
森の中で寝起きするのはごく普通のことでしたが、みるみるうちに訪れる鮮やかな春の
喜びをローズンと分かち合えないのは寂しいものでした。

でも、フォルウはお屋敷にはもう少しだけ帰らないことにしようかと思っ
ていました。二人の邪魔をしないようにって思ったこともありましたが、やつぱりフォルウ
はニーダマのことを良くは思っていなかったんですもの。

銀の狐フォルウは、北の魔女ローズンにとつて一番の家来であり友達です。もちろ
ん、人の言葉を話すことはできないのだけれど、ローズンにはちゃんとフォルウの言葉
がわかりましたし、フォルウもまた、人の言葉をしっかりと飲みこんでいるのです。

フォルウはちよつぱり湿った地面から顔を出した桃色の茸に鼻を近づけてくんくん嗅
ぐと、うつとりとした表情を浮かべました。とても、良い香りがしたのです。きつと、
さぞかし美味しい茸にちがいありません。フォルウはそつと肉づきをくわえて引き抜き
ました。自分で食べてしまおうかとも思いましたが、ぐつと我慢してお屋敷に持ち帰る
ことにしたのです。そろそろ、戻っても良い頃だろうと思つたのでしよう。

びよこびよここと楽しそうに跳ねながら、フォルウはお屋敷に向かつて森を駆けま
す。銀色の毛皮がお日さまの光を受けるたびにつやつやと輝いています。お屋敷近くの湖畔
に着いたフォルウは、びろうどのような薄緑色の葉にそつとときのこを置き、まだ氷の残
っている湖面を眺めました。ちょこんと岸に座り込み、何やら考え事でもしているよう
です。

そう、きつと、ニーダマのことを考えているのですね。あんな恐ろしい人間の男を助
けてしまって、これからローズン様はどうしようというのだろうか？ それから、ほん
とにもう戻っても大丈夫だろうか？ もしかしたら、今まさにローズン様は、悪い人間
をこらしめているのではないだろうか――と。

ひとしきり波打ち際で遊んでいたフォルウは、そつと後ろを振り向きま
した。森の奥には小さな小屋が見えます。小屋からは、たいそう楽しげな笑い声が響いていま
した。

さて、お屋敷の近くに小屋があったのでしょうか？
どれどれ、中を見てみましょうか。

5 毛皮なんか

開け放たれた窓の中には、朗らかな二つの笑顔がありました。輝くような幸せを顔から溢れ出させている美しい女のひとは、そう、ローズンです。そしてもちろん、向かいのベッドに腰かけているのはニーダマでした。

二人は手を取り合っています。きつと、フォルウがお留守にしている間に、二人の気持ちは通じ合ったのでしょうか。良かったですね、恐ろしいことが起こらなくて！

でも、何だかおかしいですね。二人はローズンの立派なお屋敷にいたのではないのでしょうか？ いえいえ、よく見てみてごらん下さい。この小さな心地よい部屋は、たしかにとっておきのお客さまの部屋でした。

二人が、何かを話していますよ。

「わたしは、あの美しい銀の狐に心を奪われていたのです。この湖を訪れるたび、いつか必ずあの銀の狐を仕留めようと考えていました。だからそのためだけに、あの銀の弓を手に入れたのです。美しい獣は、それにふさわしい美しい弓で射なければならぬのですから——」

「まあ、恐ろしいこと。あなた、その狐を仕留めてどうするおつもりでしたの？」

「もちろん、わたしの襟巻きにしようなどとは思っていませんよ！ わたしはいつか結婚する日のために、麗しのひとに差し上げられる美しい襟巻きを、銀の狐の毛皮で作るつもりなのです」

「麗しの、ひと？」

「はっはっは。麗しのひと！ わたしはここで見つけてしまったのです、麗しのひとを！ わたしはほんとうに幸せ者だ。今、麗しのひとと共にいて、銀の狐もすぐ近くに潜んでいる。この怪我がすっかり癒えたら、きつとあの銀の狐を仕留めてみせますよ。銀の弓は……なくしてしまっただけ……」

ニーダマはそう言うと、周囲を見渡しました。

「まあ……」

ローズンは喜んでいいのやら、怒ったほうがいいのやら、言葉が続きません。

「こんな森の中に住んでいるあなたの家族は、きつと父上殿は、猟師をしているのでしょうか？ わたしに一つだけ弓矢を貸してください。いいえ、銀の弓でなんかなくとも構やしません。あなたへの気持ちを勇気にして、きつと銀の狐を仕留めてみせましょう！」

その言葉に、フォルウの体がびくりと縮こまりました。何ということでしょう。やつ

ぱりあの人間は、自分のことを狙っているのです。それを知って、どうしてローズン様は平気でいられるのでしょうか。フォルウはそつと窓に近づくと、きのこをくわえたまんまで二人の話に聴き入りました。ローズンが言います。

「それはいけません。わたし、狐の襟巻きはいりませんもの」

「だって、あんなに美しい毛皮は他にありませんよ。さぞかしあなたにお似合いでしょうに！」

「いいえ、毛皮なんかありません。だって、あの銀の狐はわたしのお友達なんですよ」

「なんと、狐が友達とは！ 森の中でさぞ寂しい思いをしていたのですね。これからはわたしが友達にもなりましょう。もちろん、良い夫にもなりますよ！」

「うふふ……」

ローズンは微笑み、ささやき声で続けます。

「わたし……ほんとうに、あなたと結婚しても良いのかしら!？」

「森の猟師の娘だからといって、尻込みすることなんかありません。都に住んではいますが、わたしだってあなたのお父上と同じ猟師なのですからね」

「おやおや、ニーダマはつい、うそをついてしまったようです。都に住んでいる猟師だなんて、おかしいですよ。そんなうそをついてしまって、良くないことが起こらなければいいのですが――」。

(続きは電子書籍で！)